

近代教育黎明期のブータンにおける 学校教育・留学事情に関する基礎的研究

—シッキム政務官報告書の分析を中心に—

平山 雄大

キーワード：ブータン、近代学校教育、ハの学校、ブムタンの学校、留学、シッキム政務官報告書

【要 旨】 本稿の目的は、ブータンにおける近代教育黎明期と位置づけられる1910～1940年代の国内の学校教育及び留学事情の断片を、ブータンの隣国シッキムに駐在していたイギリス人の政務官が書き記したブータンに関する年次報告書やブータンの訪問報告書から抽出し、その記録から当時同国内に存在していた「ハの学校」及び「ブムタンの学校」の概要を示すと同時に、当時の留学事情に着目し同国の近代化を担う人材がどこでどのように育成されたのかを解明することである。

前半部分では、近代学校教育開始最初期の諸相に関して論じた。研究の結果、インドのカリンボンへ留学した少年たちと「ハの学校」の第1期生は同一人物を指していることが明らかになった。また、少なくとも最初期には「ハの学校」は年間を通して開校していたわけではなく、留学した少年らがブータンに帰国している夏に学ぶ場として機能していたこと、「ブムタンの学校」も季節移動を繰り返していた王家に付き従って場所を変える移動式の学校であったことが判明した。

後半部分では、両校の状況と就学者数の変遷を明らかにするとともに、主に「ハの学校」の第1期生の高等教育機関への進学及び各種訓練状況を追った。結果、両校ともに1920年代に一時的に閉鎖され、第2期生を新たに迎え入れ再開していること等が明らかになったが、1930年代から1940年代にかけては依然として不明点も多い。この点に関しては追加の調査が不可欠であり、今後の研究課題として残された。また、大学入学資格試験合格者はインド各地の高等教育機関において森林保護官、外科医補佐、教員等になるために学業を続けたこと、他にも軍事訓練を受けたり測量技術を習得するために各地に派遣された者がいたことが判明したが、こちらも特に1930年代後半から1940年代にかけては詳細がつかめず、今後の研究課題となっている。

はじめに

ブータン王国 (Kingdom of Bhutan、以下ブータン) において、近代学校教育が萌芽し少数精鋭のエリート教育が始められたのは王国成立後間もない1914年前後のことである。第12学年の歴史教科書によると、1914年に46人の少年が隣国インドのカリンボン (Kalimpong) にあるドクター・グラハムズ・ホーム (Dr. Graham's Homes) に留学したことが、ブータン人の近代学校教育受給の始まりとされている¹。同年には初代国王ウゲン・ワンチュク (Ugyen Wangchuck、在位1907～1926年) に仕えたウゲン・ドルジ (Ugyen Dorji) によって国内初の近代学校がハ (Haa もしくは Ha) に設立され、その翌年には後の第2代国王ジグメ・ワンチュク (Jigme Wangchuck、在位1926～1952年) らの教育のために、ブムタン (Bumthang もしくは Bumtang、Pumthang、

Poomdah) の王宮内に学校が設置された²。

この記述に代表される通り、一般的には1914年にできたハの学校及び1915年にできたブムタンの学校が国内唯一の近代学校として機能していたとされているが、インドの全面的支援を受けた第1次5ヵ年計画(1961～1966年)のもとで本格的に近代学校教育の拡充が図られるより以前の40～50年の間、ブータンにおいてどのような学校教育が施され、どのように国の近代化に向けた人材が育成されてきたのかを知る術は非常に限られている。第1次5ヵ年計画以前のブータンの学校教育を扱った数少ない先行研究としては、1940～1950年代に同国に存在した一般に向けた近代学校を「ネパール人移住者の学校」と「ブータン人の学校」に大別し、各学校の設立形態や教授言語の特徴を論じた平山の論考³が挙げられるが、当時行われていた教育事情に関する記述は、いくつかの教育研究⁴における概論を除くと、基本的にはブータン内外の研究者による歴史研究等の中に散見されるに過ぎない。

先行研究において統一された見解を見出せないことが、本稿を記す起因となっている。例えば、第12学年の歴史教科書では「46人」の少年はカリンボンに留学した人数とされているが、杉本は「46人」はハの学校に入学した人数であると説明している⁵。また、コリスター(Peter Collister)はカリンボン及びバハにおけるウゲン・ドルジの学校で「46人」の男子が教育を受けたとし⁶、第10学年の歴史教科書は同部分や年号を濁し、1914年までに「46人」のブータン人生徒が就学したと記している⁷。一方で、その時のブータンからの留学生はブータン東部からの17人とハからの17人の合計34人だとするものも存在する⁸。ハの学校の設立年に関しても諸説が入り乱れ、1914年とするもの以外に、1912～1913年⁹、1913年¹⁰、1915年¹¹とするものが確認できる。また、ドルジ(C. T. Dorji)はブータンへの近代学校教育の導入は1927年であり、同年に30人の少年がカリンボンに留学したとしている¹²。さらに、初代国王によって多くの学校が国内に設立されたとの見解を示すものがある一方で¹³、1915年にブムタンで学校が開校して以降は、1950年代まで新たな学校は作られなかったとするものや¹⁴、1960年代まで近代学校教育はブータンには存在せず、ごく少数の者が国外(主にインド)で教育を受けていたに過ぎないとするものもある¹⁵。すなわち、学校の設立年や就学者数(留学生数)、所在地、教育内容・設置形態等多くが特定・把握されていないという状況が存在しているのである。

そこで本稿は、ブータンにおける近代教育黎明期と位置づけられる1910～1940年代の学校教育に関する情報を、1899年よりブータンの隣国シッキム王国(Kingdom of Sikkim、以下シッキム)に駐在し、ブータンを含めた周辺諸国・地域を管轄していたイギリス人の歴代政務官(political officer、以下シッキム政務官)が書き記したブータンに関する年次報告書¹⁶やブータンの訪問報告書¹⁷から抽出し、その記録からハの学校及びブムタンの学校の概要を示すと同時に、当時の留学生の進学・各種訓練状況に着目しブータンの近代化を担う人材がどこでどのように育成されたのかを明らかにする。

1. 近代学校教育開始最初期の諸相

本節では、近代学校教育開始最初期(1910年代半ば前後)の諸相について論じる。特に、カリンボンへ留学した少年たちとハの学校で学んでいた少年たち(以下、ハの学校の第1期生)の関

係性や各学校の設置形態を検証するとともに、カリンボンでの留学先に関して定説とは違うものを提示する。

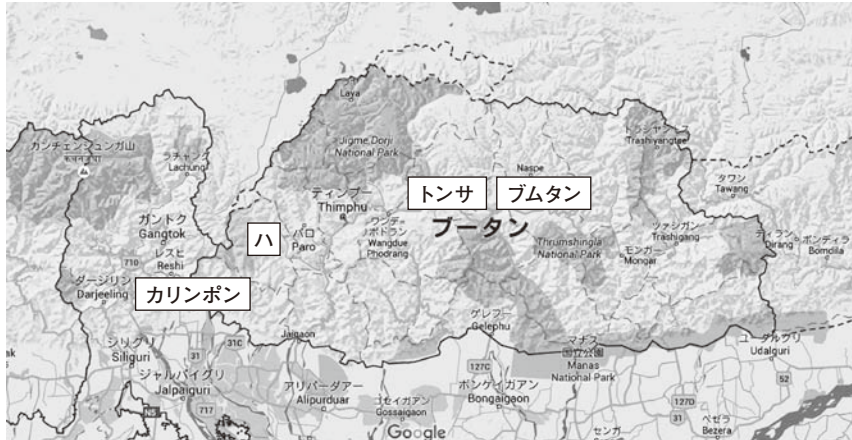


図1 ハ＝カリンボン、ブムタン＝トンスの位置

1.1 各学校の設立年と形態

シッキム政務官の報告書に初めて近代学校に関しての記載がなされたのは、ベル（C. A. Bell、在任1908～1918年及び1919年～1921年）が1915年5月12日付で記した年次報告書内においてである¹⁸。

14. 46人のブータン人少年が、カリンボンのスコットランド国教会使節に任命された教師によって教育を受けている。彼らはラジャ・ウゲン（筆者注：ウゲン・ドルジを指している）とともに、冬はカリンボン、夏はブータンのハに滞在している。少年たちは良く学んでいる。ラジャ・ウゲンは、取るに足らない程度のもので、ブータンの開発を促進する可能性のあるこの事業の費用の責任を自らに負わせているように見える。

また、その翌年1916年5月18日付の年次報告書には、ブムタンの学校に関しても報告がなされている¹⁹。

11. 国王の居住地である（ブータンの）ブムタンに、ブータン人少年に対して彼らの母語であるチベット語（筆者注：これは古典チベット語のチョケを指していると思われる）及び英語を教える学校が開校している。この学校は最近開校したもので、現在学んでいるのはたった18人のみである。しかしながら、ブータン人少年に英語教育を施すことを自らの使命としているラジャ・ウゲン・ドルジの助力により、徐々にブータンで重要な教育機関となるであろう。別の学校が西ブータンのハに2～3年前から存在しており、そこには46人の少年が在籍している。寒い季節になると、彼らはラジャ・ウゲンとともにカリンボンに降りてくる。ラジャ・ウゲンは、カリンボンのスコットラン

ド国教会使節のサザーランド博士 (Dr. Sutherland) からその学校の教師を獲得している。当初、彼は少年の両親、及びブータン国外の同宗信徒 (co-religionists) からの反対を経験したが、初代国王の後押しによって彼は反対勢力を払いのけることができた。反対した者は、現在は、このささやかな量の西洋の教育が国のために有益であることを実感しているように見える。

さらに、1921年に初代国王が当時の英領インド総督アイザックス (Rufus Isaacs) に送った書状にも、以下の通り最初期の近代学校教育に関する記述がある²⁰。

1914年に、私は45人の少年を勉学のためにカリンボンへ送り (夏のセッションはブータンのハで)、1915年にヒンディー語と英語が教えらえる学校をブムタンに開校した。カリンボンに行った45人の少年のうち33人は中等教育スタンダードを修了しており、彼らのうちの4人は今後18ヵ月の間に大学入学資格試験を受験するであろう。少年たちは自身が利発な生徒であることを証明した。ブムタンの学校では、生徒のうち8人が初等教育スタンダードに達した。

ハの学校の設立年に関して、初代国王は書状の中で「1914年」と明確に記しているが、ベルは1916年5月の時点で「2～3年前」としており、1914年前後であることはまず間違いないであろうが年号を断定することは難しい。また、ブムタンの学校の設立年に関しては、初代国王は「1915年」と記しているが、ベルは1916年5月の時点で「最近」とのみ表現している。さらにハのゴンジム・ウゲン・ドルジ高等中学校 (Gongzim Ugyen Dorji Higher Secondary School) の校舎内に近代学校教育100周年を記念して設置された仏塔には「1913年」と彫られており、こちらも現時点で筆者が所有する情報から年号を特定させることはかなわない。

上記の報告書や書状の記述を分析すると、カリンボンへ留学した少年たちは、ウゲン・ドルジに付き従って冬の時期はカリンボン、夏の時期はハと季節移動を繰り返していたことが分かる。もともとカリンボンのブータン・ハウス (Bhutan House) に拠点を置いていたウゲン・ドルジが夏期にのみハに腰を据えるという形態は息子ソナム・トブゲ・ドルジ (Sonam Tobgye Dorji) や孫でブータン初代首相を務めたジグメ・パルデン・ドルジ (Jigme Palden Dorji) にも引き継がれており²¹、ドルジ家の慣習であったと考えられる。少なくとも最初期は、ハの学校は年間を通して開校していたわけではなく、カリンボンへ留学した少年らが帰国している夏期にのみ、同地から派遣された教師のもとで学ぶ場として機能していたようである。ゆえに、カリンボンへ留学した少年たちとハの学校の第1期生は同一人物を指していると結論づけられる²²。

彼らが留学をした正確な年号を特定させるのは難しく、また留学をしたのが先か、ハの学校が開校したのが先かという問いに対しても明確な回答を提示することはできない。ハの学校の就学者数 (= カリンボンへの留学者数) に関しても同様で、初代国王は「45人」とし、ベルは「46人」としている。ゴンジム・ウゲン・ドルジ高等中学校の校舎内の仏塔に彫られた名簿には46人分の番号が付されているが、そのうち2人の詳細はまったくの不明とされている。

一方で、ブムタンの学校はどのような形態が採られていたのであろうか。1931年に記された当時のシッキム政務官ワイヤー (J. L. R. Weir、在任1928～1932年) のブータン訪問報告書に明

確に記されているが、「ブムタンの学校」という名称が定着している同校も、冬の時期はトンサ (Trongsa もしくは Tongsa)、夏の時期はブムタンと季節移動を繰り返していたワンチュク家 (王家) に付き従って場所を変える移動式の学校であった²³。初代国王の後継者である後の第2代国王の教育の場という性格上それは至極当然のことであり、ともに学んでいたのは王家に仕える者たちの子弟、つまり将来的に彼の側近となる者たちであった²⁴。ブータン版ミエザの学校と形容できる同校には、ハの学校の第1期生であるタシがインドで学業を終えた後に教師として着任し、後の第3代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュク (Jigme Dorji Wangchuck、在位1952～1972年) や彼の異母弟であるナムゲル・ワンチュク (Namgyel Wangchuck) らの指導にあたった。

ブムタンの学校の就学者数はハの学校以上に特定することが難しい。バルは年次報告書に「18人」と記しているが、ゴンジム・ウゲン・ドルジ高等学校の校舎内の仏塔には16人分の番号が付されている (ただしそのうち3人の名前は不明)。さらに「21人」²⁵、「皇太子ジグメ・ワンチュクと13人の生徒」²⁶、「皇太子ジグメ・ワンチュクと約14人の生徒」²⁷等の記述も存在する。

1.2 カリンボンでの留学先

ハの学校の第1期生である「46人」のブータン人少年のカリンボンでの留学先に関しては、歴史教科書に記されているスコットランド国教会の神父であるグラハム (J. A. Graham) によって1900年に設立されたドクター・グラハムズ・ホームではなく、同じくスコットランド国教会の神父であり、グラハムが師事していたサザーランド (W. S. Sutherland) らによって1886年に設立されたSUMI (Scottish Universities' Mission Institution) であろうと筆者は考えている。

ドクター・グラハムズ・ホーム—1947年までの名称はセント・アンドリュース・コロニアル・ホーム (St. Andrew's Colonial Homes) —には在学者名簿や雑誌が残っているが、それらからブータン人留学生が20世紀初頭に同校で学んでいたという事実を確認することはできない。一方で、1910年代半ば～後半 (推定) にカリンボンに留学した少年たちを撮影した写真の右端に、当時のSUMIで要職に就いており、現校長の曾祖父でもあるプラダン (H. D. Pradhan) が写っていること²⁸、1913年から1915年にかけて、ウゲン・ドルジがSUMIの現地スタッフを務めていたこと²⁹、1924年にSUMIで撮られた、タシ、カルチュン、パンチュン、ド・ティンレらハの学校の第1期生らとSUMI関係者の集合写真が現存していること等を総合的に判断するに、彼らが学んでいたのはドクター・グラハムズ・ホームではなくSUMIであったとするほうが納得がいく。

10. ブムタンとハの学校は繁栄している。ハの学校は、1917年10月にベンガル州公教育長W.W.ホーネル (W. W. Hornell) 及びカリンボンのW.S.サザーランド博士の訪問を受けた。この訪問、そしてこのとき提供された教育問題に関するアドバイスは、ブータン宮廷側からとても感謝された。

グラハム及びサザーランド本人がブータンの近代学校教育の黎明に与えた影響は大きい。1921年にブータンを訪問したロナルシャー卿 (Earl of Ronaldshay) は、ハの学校の設立計画の発動及び運営にはグラハム、サザーランド両名の助言と協力が大きく作用していることを指摘している³⁰。上記の通りサザーランドは1917年10月に当時のベンガル州公教育長ホーネル (W. W. Hornell) と

ともにハの学校を視察しており³¹、その関係の深さがうかがえる。ベルの年次報告書内にある「ドクター・サザーランドからその学校（筆者注：ハの学校を指している）の教師を獲得している」という記述は、サザーランドの要請を受けてSUMIの教師もしくはスコットランド国教会使節関係者がハの学校に教授に赴いていたと理解して良いであろう。グラハムもまた、1921年の夏に初代国王の賓客としてブータンを訪れているが³²、ドルジ家の面々はカリンボンにおいてグラハムとも家族ぐるみの付き合いをし非常に良好な関係を築いていたことが各種資料から判明している。

1.3 近代学校教育の開始を巡る反対意見

前述の1916年5月18日付のベルの年次報告書には、近代学校教育を推進するにあたって、ウゲン・ドルジが少年たちの両親及び国外の同宗信徒から反対意見を浴びせられた旨の記述が見られる。ここでの同宗信徒とは仏教徒を指しており、その代表的人物は、仏教団体マハーボディー・ソサエティ（Maha Bodhi Society、大菩提会もしくは大菩薩会）の創設者であり、「スリランカ仏教復興の父」とも評されるスリランカ人仏教活動家のダルマパーラ（Anagarika Dharmapala）である。反キリスト教かつ反西洋諸国が信条のダルマパーラは、クリスチャンの学校にブータン人が留学していることに悲観し、そのような学校にブータン人を通わすべきではないと1914年11月19日付の手紙でウゲン・ドルジに進言をしている³³。

約20人のブータン人少年が英語を学ぶためダージリン（Darjeeling）に送られ、宣教師に預けられていると聞いた（筆者注：実際は「46人」の少年がカリンボンに〜か？）。悪いニュースだ。なぜブータン・ラジャ（筆者注：ウゲン・ドルジを指している）は国内で学校を開いて若者に英語を教えないのだ？仏教に関して無知な若い仏教徒がクリスチャンの寄宿学校に身を置くと、考えかたはすぐに変わってしまう。彼らはクリスチャンの習慣を吸収し、自らの宗教に無頓着になる。若く柔らかい心はとても影響を受けやすい。日々の生活で聞いたことは真実として受け取られ、精神は悪い方向に導かれる。それゆえ、我々の仏様（Lord Buddha）は創造主、救世主、カルマの法則の終焉とともにある偽りの信仰を強く非難した。日本人のやりかたを見なさい。彼らは国内に学校を開き、イギリス人やロシア人の男性教師・女性教師を招聘して英語を学んでいるでしょう。

必要なのは技術・産業教育だ。日本が発展したのはまさにそのため、若者は日本に輸入されたものを国内で生産する方法を学んでいた。ブータン人生徒の何人かは日本に留学させるべきだ。そして技術学校で学ばせなさい。産業のない国は貧しいままだ。私はブータン少年らを非常に心配している。セイロンでは、20万人の仏教徒の少年が非仏教系の学校に通い、永遠に失われてしまった。卒業後彼らはクリスチャンになるか、道徳的にとても悪質な人間になってしまう。羽ばたく世代（rising generation）の教育は国家の伝統（national lines）にのっとってなされるべきだ。キリスト教の宣教師は、仏教徒の生徒の教師にはふさわしくない。

ブータン国内に近代学校が設立された背景には、このダルマパーラの進言が、そして間接的に

はダルマパーラが賞賛した日本の近代学校教育が影響していたかもしれない。手紙の中には、「教育は国家の伝統にのっとってなされるべきだ」等、1960年代以降のブータンで湧き上がる教育課題を予見したような指摘も見られる。

キリスト教をはじめとした西洋文化に対する反発を強く持っていたダルマパーラも、英語教育を施すことには肯定的であり、ブータン国内における英語教育の普及を推奨している。年次報告書の記述を信頼すると、ハの学校もブムタンの学校も最初期より英語教育を取り入れており、1960年代にブータンの学校教育の教授言語がヒンディー語から英語に切り替えられる50年近く前から、同国の近代学校教育と英語教育は密接な関係にあったことが分かる³⁴。

2. 学校教育・留学事情の変遷

以下は、1910年代末から1940年代後半まで約30年の間に記されたシッキム政務官の年次報告書から、ブータンの学校教育や留学事情に関する記述を抜粋したものである。本節ではこの抜粋をもとに、ハの学校及びブムタンの学校の就学者数等の変遷及びハの学校の第1期生を主とした留學生の状況を明らかにする。

キャンベル (W. L. Campbell、在任1918～1919年) 年次報告書 (1919年5月22日付)³⁵

5. ブムタンとハの学校は発展を続けている。就学者数はそれぞれ20人、45人であった。

ベル 年次報告書 (1920年5月10日付)³⁶

9. ブムタンとハの学校は良く発展している。就学者数はそれぞれ21人、45人であった。

マクドナルド (D. McDonald) 年次報告書 (1921年5月10日付)³⁷

10. ブムタンとハの学校は良く発展している。就学者数はそれぞれ21人、38人であった。

ベイリー (F. M. Bailey、在任1921～1928年) 年次報告書 (1922年4月29日付)³⁸

7. ブムタンとハの学校は良く発展している。就学者数はそれぞれ24人、37人であった。後者の学校の数人の生徒は、大学入学資格試験のためにカリンボン技術学校 (Kalimpong Training Institute) にて学んでいる。数人は、織りと木工を学ぶためにカリンボンの工業学校 (Industrial School) にて学んでいる。

14. 1921年後半に向けて、国王陛下はシッキム政務官を通してインド総督に、彼の国の開発を視野に入れたブータン人少年の各種職業訓練に対する財政その他の援助を申し入れた。国王陛下はまた、毎年の補助金の増額も求めた。この案件は、インド政府によって検討中である。

ベイリー 年次報告書 (1923年5月18日付)³⁹

7. ブムタンの学校は良く発展している。そこには17人の少年が就学している。ハの学校は、ブータン国王陛下のエージェントであるデブ・ジンボン・ソナム・トプゲ・ドルジの監督のもとカリンボンに移転した。そこには24人の少年が就学している。そのうち2人は訓練に出されている (1人は森林管

理・その他の測量術を学んでいる。1人は大学入学資格試験を受験したが結果はまだ不明である)。

10. 1921年後半にインド政府に提出された、ブータン国王陛下によるブータン人少年の教育に対する財政援助及び現在の補助金の増額の申し入れは、依然としてインド政府によって検討中である。シッキム政務官は、ブータン人少年を訓練する際の概算費用の見積りを準備するため、材料を収集している。

ベイリー 年次報告書 (1924年6月16日付)⁴⁰

7. ブムタンの学校には17人の少年が在籍している。彼らは申し分なく成長している。1923年に、1人のブータン人少年が大学入学資格試験に合格した。彼はブムタンの学校で教師として働いている。ブータン国王陛下のエージェントであるデブ・ジンボン・ソナム・トプゲ・ドルジの監督のもと、カリンボンの学校には20人の少年が在籍している。彼ら以外に、1人が高等教員免許状 (higher grade teacher's certificate) を取得し、4人が大学入学資格試験を受験した。結果はまだ分かっていない。

8. ブータン人少年の教育に関連して、インド政府は合計4万9,629ルピーを供与した。この件に関しては、昨年の報告書の第10パラグラフを参照されたい。

ベイリー 年次報告書 (1925年4月27日付)⁴¹

7. ブムタンの学校には10人の少年が在籍している。彼らの成長は申し分ない。国王陛下のエージェントであるデブ・ジンボン・ソナム・トプゲ・ドルジの監督のもと、カリンボンの学校には15人の少年が在籍している。彼ら以外に、8人が前回 (1924年) の大学入学資格試験を受験した。そのうち3人は試験に合格し、2人はデヘラドゥーン (Dehra Dun) の森林研究学校 (Forest Research Institute and College) で森林保護官 (forest ranger) となるための訓練を受けている。また、カルカッタ (Calcutta) のキャンベル医学学校 (Campbell Medical School) にて、他の少年たちを外科医補佐 (sub-assistant surgeon) にする訓練の手配が進んでいる。

ベイリー 年次報告書 (1926年5月17日付)⁴²

7. ブムタンの学校には10人の少年が在籍している。今年中、彼らは良く学んだと報告されている。彼らは英語とヒンディー語を教わっている。ブータン国王陛下のエージェント (筆者注: ソナム・トプゲ・ドルジを指している) は、小さな少年の教育のために再びハに学校を開校した。そこには17人の少年が在籍している。彼らはヒンディー語を教わっている。カリンボン高校 (Kalimpong High School) では、現在はたった5人の少年が勉強している。さらに8人の男子が大学入学資格試験に受かり、1915年頃にカリンボンに送られた46人のうち合計11人が合格したことになった。これらの8人以外に、4人は以下の技術系分野の訓練のためにすでに各地へ送られている。

- (a) 1人は鉱山技術者 (mining engineering) となるために、カルカッタのベンガル工科大学 (Bengal Engineering College) に
- (b) 2人は獣医補佐 (veterinary assistant) となるために、カルカッタのベンガル獣医大学 (Bengal Veterinary College) に

(c) 1人は森林保護官となるために、デヘラードゥーンに

また、訓練のために他の4人を以下に送ることが計画されている。

(i) 2人を教師とするために、バーガルブル (Bhagalpur) の教員養成校 (Training School) に

(ii) 2人を外科医補佐とするために、カルカッタのキャンベル医学学校に

また、2人の少年を製革技術者 (tanner) とするためにカンプール (Cawnpore) の馬具・鞍具工場 (Harness and Saddlery Factory) で訓練する計画がある。そのうちの1人は大学入学資格保持者である。

もう1人の少年が大学入学資格試験を受験したが、結果はまだ公表されていない。

12. 1925年12月、ブータン宮廷は、宮廷が費用を負担して2人の少年を軍人にする訓練を受けさせることに關して、インド政府からの援助の獲得をシッキム政務官に依頼した。提案された訓練の期間は2年である。(中略) インド政府は、ブータン宮廷によってすべての費用が負担されることに関する提案に同意した。訓練のために選ばれた2人の少年はチェンチョ・ドルジ (Chenkyo Dorji) とカド・ラ (Kado La) であり、彼らは1926年4月16日にシロン (Shillong) に到着し、第2大隊第8グルカ連隊 (2nd Battalion 8th Gurkha Rifles) に所属している。

ベイリー 年次報告書 (1927年5月15日付)⁴³

7. ハの学校の少年は、1年を通して良く学んだと報告されている。就学者数は17人である。

ブムタンの学校は目下閉鎖されている。

カリンボン高校では現在2人の少年のみが学んでいる。

前学期中にさらに2人の少年が大学入学資格試験を受験した。この報告書を完成させる時点ではその結果はまだ不明である。もし合格していれば、大学入学資格保持者は13人になる。

加えて、大学入学資格を保持している6人の少年は、以下の分野の技術訓練のために各地へ派遣されている。

(a) 2人は教師となるために、バーガルブルの教員養成校に

(b) 2人は外科医補佐となるために、カルカッタのキャンベル医学学校・病院に

(c) 2人は製革技術者となるために、カンプールの馬具・鞍具工場に

ブータン宮廷はまた、大学入学資格を保持していない2人の少年に軍事訓練を受けさせている。彼らはシロンの第2大隊第8グルカ連隊に所属しており、すべての費用は宮廷が負担している。

また、3人の少年は森林保護官の課程を受けるためにデヘラードゥーンに送られているが、そのうち2人は最終試験に合格しカリンボンへと戻った。彼らはブータンに帰国する前に広範な経験を得るために、数ヵ月間ダージリンで働くことが提案されている。

1人の少年を測量士とするために、1922年後半にブータン宮廷は自らの費用で彼をインド測量局 (Survey of India) に派遣した。彼はデヘラードゥーンにあるインド測量局測地部門 (Geodetic Branch) に配属され、1926～27年のフィールドシーズン中のヒル・トレーニングのためにシロンにあるインド測量局の東部地区 (Eastern Circle) に転任する1926年末までそこにとどまった。彼は今年訓練を修了し、ブータンで働くために帰国する予定である。

ベイリー 年次報告書（1928年5月18日付）⁴⁴

8. ハとブムタンの学校には、それぞれ17人、20人の少年が在籍している。後者の学校の生徒のひとり、国王陛下（筆者注：第2代国王を指している）の一番下の弟君である11歳のマハラジャ・クマール・ケサン・テンジン（ナク）（Kesang Tenzing, Naku）である。少年らは申し分なく成長している。

森林保護官の課程に進学した3人は訓練を修了し、森林公園（State Forests）で働いている。

1922年から測量の訓練をしていた1人の少年は訓練を修了し、ブータンに帰国した。

インド政府の費用で他のさまざまな分野の訓練を受けている少年らは、申し分なく成長している。

ワイヤー 年次報告書（1929年5月29日付）⁴⁵

4. ハの学校の少年らは1年を通して良く学んだと言われている。就学者は17人である。

バーガルプルで訓練を受けていた2人のブータン人少年（1926～27年の報告書の第7パラグラフ内第5サブ・パラグラフを参照）は、1928年5月に2年間の教員養成課程を修了してブータンに帰国した。

1人のブータン人少年が、鉱山技術者の訓練のためにカルカッタ近郊のシブプール（Sibpur）に位置するベンガル工科大学に派遣されていた。彼は1929年3月に3年間の課程を修了した後、ブータンに帰国した。

2人の少年が、獣医補佐の訓練（3年間の課程）のためにカルカッタのベンガル獣医カレッジに派遣されていた。彼らのうちの1人は1929年3月に最終試験に合格しブータンに帰国したが、もう1人は落第し、カレッジに残った。

2人のブータン人少年は、ビハール・オリッサ州のパラミュ（Palamau）地方でラック養殖の実用訓練を受けた。彼らは1928年9月に2年半の訓練を修了し、ブータンに帰国した。彼らのうちの1人は、デヘラドゥーンで訓練を受けた3人の森林保護官のひとりである。彼らの訓練費用はインド政府が負担した。

大学入学資格スタンダードに達した2人のブータン人少年は、調合師となるため、ブータン宮廷の費用でカリポン病院（Kalimpong Hospital）において訓練を受けている。

5. 2人のブータン人軍人（1926～27年の報告書の第7パラグラフ内第6サブ・パラグラフを参照）は1928年6月にシロンにおける訓練を修了し、青年将校（Jemadar）の称号を得てブータンに帰国した。

ワイヤー 年次報告書（1930年4月30日付）⁴⁶

4. ハとブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている。

カルカッタのベンガル獣医カレッジの昨年のディプロマ試験に落第したと報告された獣医学生は、1930年3月の同試験に合格し、ブータンで働くために帰国した。

ウィリアムソン（F. Williamson、在任1932～1935年） 年次報告書（1931年5月4日付）⁴⁷

4. ハとブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている。

ウィリアムソン 年次報告書（1932年4月22日付）⁴⁸

4. ハとブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている。

11. 1927年の報告書の第7(b) パラグラフで報告されている通り、パンチュン (Phanchung) とプブ・ギャツェン (Phup Gyatsen) という2人の少年が、外科医補佐の訓練のためにカルカッタのキャンベル医学学校・病院に派遣された。不幸にも、少年のうちのひとり (プブ・ギャツェン) は病氣 (彼は癆 (phthisis) で苦しんでいたと報告されている) のため学業を断念せざるを得なかった。もう1人の少年、パンチュンは1931年12月に最終試験に合格した (第3学年時の試験に落第したため、訓練期間は1年延長されていた)。ブータン宮廷の望みに従って、彼は、実用的な医学・外科訓練のため1932年1月からもう1年間学校に留まることが許可された。この追加の訓練に関する費用は、さまざまな技術分野においてブータン人少年を訓練することを目的とするインド政府の1924年の基金から供与することが提案されている。

ウィリアムソン 年次報告書 (1933年5月3日)⁴⁹

4. ハとブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている。

11. ブータンの外科医補佐パンチュンは、カルカッタのキャンベル医学学校で追加の1年間の訓練を修了した後、1933年1月にブータンに帰国した (昨年の報告書の第11パラグラフを参照)。

ウィリアムソン 年次報告書 (1934年4月20日付)⁵⁰

4. ハとブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている。

8. ブータン宮廷の依頼により、インド政府の費用によって、14人のブータン人少年がシロンの第2大隊第10グルカ連隊で軍事訓練を受けている。1933年1月より開始された同訓練は、2年間続けられる。少年たちは、軍司令官 (Army Commander) によって絶賛され、注目された。私自身1934年2月にシロンで彼らに会ったが、彼らの成長に非常に感銘を受けた。

ウィリアムソン 年次報告書 (1935年5月7日付)⁵¹

5. ハとブムタンの学校による発展は、申し分ないと報告されている。

9. 軍事訓練のためにシロンの第2大隊第10グルカ連隊に所属していた14人のブータン人少年 (1933～34年の報告書の第8パラグラフを参照) は、2年間の課程を修了し1935年1月1日にカリンボンへと戻った。結局、2月に国王 (筆者注：第2代国王を指している) とともにブータンへと帰国した。

ゲールド (B.J. Gould、在任1913～1914年及び1935～1945年) 年次報告書 (1936年5月17日付)⁵²

4. ハとブムタンの学校は良い発展を遂げたと言われている。

8. ペマ・ウォンディ (Pema Wangdi) とチャド (Chado) という、1933年と1934年に第2大隊第10グルカ連隊に所属しシロンで軍事訓練を受けた2人のブータン人の若者が (1934～35年の報告書の第9パラグラフを参照)、山岳砲の使いかたの訓練のために、グワリオール山岳砲兵中隊 (Gwalior

Mountain Battery) に3ヵ月間所属した。彼らは所属期間(当初の期間から15日間延長された)が終了した1936年2月1日にグワリオールを後にした。

ゲールド 年次報告書(1938年5月30日付)⁵³

4. ハとブムタンの学校は良い発展を遂げたと言われている。

ゲールド 年次報告書(1939年5月16日付)⁵⁴

4. ハとブムタンの学校は良い発展を遂げたと言われている。

11(b) ブータン宮廷は、測量の実用訓練をさせるために、第12測量団がシッキムに来た際にブータン人少年を派遣した。

ゲールド 年次報告書(1940年5月9日付)⁵⁵

4. ブムタンの学校は良い発展を遂げたと言われている。

ラジャ・ドルジ(筆者注: ソナム・トプゲ・ドルジを指している)の16歳の長女はすべての教科で「良(credit)」を獲得し、上級ケンブリッジ試験(Senior Cambridge Examination)に合格した。

10(b) ブータン政府は測量士の訓練のためにデヘラードゥーンにブータン人少年を派遣した。

10(c) ブータン政府はまた、外科医補佐の訓練のためにカルカッタのキャンベル医学学校にブータン人少年を派遣した。

ゲールド 年次報告書(1941年4月16日付)⁵⁶

4. ブムタンの学校は良く発展したと言われている。

ゲールド 年次報告書(1942年5月1日付)⁵⁷

4. ブムタンの学校は良く発展したと言われている。ラジャ・ドルジの長男ジグメ・ドルジ(Jigme Dorji)(筆者注: 後の初代首相ジグメ・パルデン・ドルジを指している)は、デヘラードゥーンのI.C.S 技術学校(I.C.S. training School)で数週間を過ごした。実用的な森林管理を研究するための特別な機会が、デヘラードゥーンの森林研究学校(Imperial Forest Research Institute)によってもたらされた。

ゲールド 年次報告書(1943年5月付)⁵⁸

4. ブムタンの学校は、良く発展していると報告されている。国王の長男ジグメ(Jigme)(筆者注: 後の第3代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュクを指している)は英語を教えられ、良く学んでいる。

ゲールド 年次報告書(1944年6月22日付)⁵⁹

4. ブムタンの学校は、引き続き申し分なく発展している。

ゲールド 年次報告書（1945年4月23日付）⁶⁰

4. ブムタンの学校は、引き続き申し分なく発展している。

ホプキンソン（A.J. Hopkinson、在任1945～1948年） 年次報告書（1946年5月31日付）⁶¹

4. ブムタンの学校は申し分なく発展していると報告されている。

ジグメ・パルデン・ドルジ 年次報告書（1947年4月12日付）⁶²

4. ブムタンの学校は申し分なく発展した。

2.1 各学校の状況と就学者数の変遷

各学校の就学者数は、1920年代にはシッキム政務官によって頻繁に記録されている。ベルの報告では設立当初はハの学校の就学者数は「46人」、ブムタンの学校の就学者数は「18人」となっていたが、前者はその後微減、後者はその後微増し、1922年の時点で各学校の就学者数は37人、24人と報告されている。この頃になるとハの学校の生徒は同校を卒業し、技術学校や工業学校へと進学する者が現れてきている。前述の初代国王の書状によると、1921年の時点で「45人」のうち33人がすでに中等教育スタンダードを修了しており、大学入学資格試験に向けた勉強が続けられていく。おそらくそのためであろうが、1923年5月18日付の年次報告書によると、それまで季節移動とともに継続されてきたハの学校は閉鎖され、以降はソナム・トブゲ・ドルジの監督下でカリンボンに定住しながら教育が続けられることになる。このカリンボンの学校の場所もまた定かではないが、少年たちはブータン・ハウス内の寄宿舎で生活していたことが判明しており⁶³、この寄宿舎が学校としても機能しそこからSUMIにも通学していたのではないかと推察される。

同年次報告書によると、カリンボンの学校の就学者数は24人、ブムタンの学校は17人と減っており、その翌年の就学者数はそれぞれ20人、17人、さらにその翌年はそれぞれ15人、10人と報告されている。諸事情により学問の道を中断した者もいるだろうが、留学生の多くは卒業し大学入学資格試験を受け、デヘラドゥーンやカルカット等インド各地にて森林保護官や外科医補佐になる訓練に従事していく（後述）。

1926年5月17日付のベイリーによる年次報告書には、ハの学校が再開され新たに17人の少年（以下、ハの学校の第2期生）が入学したことが記されている。同年次報告書よりカリンボンの学校は「カリンボン高校」と表記され、その就学者数は5人、さらにその翌年は2人のみと報告されている通り、ハの学校の第1期生のほとんどが卒業したタイミングで、学校を再開し第2期生を入学させたものと考えられる。

1927年5月15日付の年次報告書によるとブムタンの学校はこの時期閉鎖されていたようであるが、これは1926年に初代国王が崩御し第2代国王が即位したと密接に関連し、学びの場としての機能を終え第1期生が揃って卒業したためである可能性が高い。その翌年の年次報告書には、第2代国王の弟を含めた合計20人の少年がブムタンの学校に在籍していると記載されており、彼らのことをブムタンの学校の第2期生と呼ぶことができよう⁶⁴。

1930年代に入ると、「ハとブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている」

という文章が定形となり、両学校の近況に関する詳細は省略され、留学した者の試験結果やインド各地での訓練状況の報告に重きが置かれるようになる。そのため年次報告書から各学校の変遷を知ることは難しい。数少ない当時の学校教育を描写したものとしては、ワイヤーが1931年に記したブータン訪問報告書がある⁶⁵。

ブータンの教育は限定されている。ラジャ・ドルジ（筆者注：ソナム・トプゲ・ドルジを指している）によってハで続けられている学校では、20人ほどの少年がヒンディー語及び英語で教育を受けている。この学校から、将来、ブータンの文明レベルを上げる助けとなる工学、医学、獣医学の仕事を担当候補者が見出される。

ヒンディー語を教える小さな学校が、国王によってトンサ（夏はブムタン）で続けられている。

1937年から1947年までSUMIで学んだタシ・トプゲ（Tashi Tobgyel）は、SUMIに入学したブータン人生徒として自身は第3期生にあたると述懐しているが⁶⁶、この時期のハの学校の生徒とSUMIへの留学生の関係性や学校の形態は不明な点が多い。1938年にブータンを訪れたグールドは、「時にはハ、時にはカリンボンに位置するラジャ・ドルジ（筆者注：ソナム・トプゲ・ドルジを指している）の学校に、約10～12人の若者が学んでいる」⁶⁷と、引き続き移動を繰り返すかたちが採られていたことを指摘しているが、同氏は1943年には「ラジャ・ドルジ（筆者注：同上）はカリンボンでブータン人の少年のための小さな学校を運営している」⁶⁸と書くのみで、ハの学校の存在に触れていない。この間に1920年代前半と同様にハの学校が閉鎖されることがあったのか否か、ハの学校の生徒とSUMIへの留学生はまったく別の人物なのか否か、これらの疑問に回答を付すためにはさらなる調査が必要である。

1940年代に入ると年次報告書からハの学校の記述はなくなり、「ブムタンの学校は良く発展したと言われている」、「ブムタンの学校は、引き続き申し分なく発展している」等とブムタンの学校に対しての単調な報告が繰り返されることになる。1943年5月付のグールドによる年次報告書のみ、それに加えて後の第3代国王がブムタンの学校にて英語を学んでいることを指摘している。

2.2 留学生の進学・各種訓練状況

ハの学校の第1期生を主とした留学生に求められたのは、ブータンの近代化を担う知識や技術の獲得であった。1921年に記された初代国王の書状はブータン人少年の学業・訓練等に対する財政援助を依頼するものだが、「現在直面している問題は、ブータンの開発のためにこれらの少年をどのように活用するかである」⁶⁹と、同書状には少なくとも2人の少年を医者にする、2人の少年に獣医カレッジ（Veterinary College）を修了させる、少年数人に科学と教授法を学ばせ、その後6人の少年にブータンで初等教員養成校を運営させ国内各地に設置する学校の管理をさせる、3人の少年に農業・酪農業の科学的・実用的訓練を受けさせる、2人の少年に織りの最新技術を学ばせ、他の者に製革法を学ばせる、4人の少年を森林管理学校（School of Forestry）で学ばせる、1人の少年に鉱山業の訓練をさせる、2人の少年を土木技師になるための大学に通わせる、2人の少年に印刷所を運営するための訓練を受けさせる、といったその後の人材育成目標が

細かく記されており⁷⁰、当時ブータン（ブータン宮廷）がどの分野の人材を欲していたのかを示す貴重な資料となっている。

1920年代に入ると、ハの学校の第1期生の中には中等教育を修了し大学入学資格試験を受験する者が現れてくる。ベイリーによる1923年5月18日付の年次報告書にて初めて同試験（1922年）の受験者が確認され、1923年には4人、1924年には8人が受験した⁷¹。そして1926年5月17日付の年次報告書には「1915年頃にカリンボンに送られた46人のうち合計11人が合格した」との報告がなされている。

大学入学資格試験の合格者はデヘラードウーンの森林研究学校、カルカッタ近郊シブプールのベンガル工科カレッジ、同じくカルカッタのベンガル獣医カレッジ、キャンベル医学学校、バーガルブルの教員養成校といったインド北部・東部に位置する高等教育機関へ進学し、それぞれ森林保護官、鉱山技術者、獣医補佐、外科医補佐、教員になるために学業を続けている。一方で、製革技術者となるためにカンプールの馬具・鞍具工場に派遣された者もいた。また大学入学資格試験に合格していない者も、シロンのグルカ連隊に所属し軍事訓練を受けたり、パラミュでラック養殖の実用訓練を受けたり、カリンボンの病院で調剤師となる訓練を受けたりしている。彼らに先立ち、測量技術を学ぶために1922年後半よりデヘラードウーンのインド測量局測地部門（途中よりシロンのインド測量局東部地区）に派遣された者もいた。



図2 近代教育黎明期のブータン人の留学先

彼らは1920年代後半から1930年代前半にかけてそれぞれの学業・訓練を終え、順次ブータンへと帰国している。例えば、教員養成校で学んでいた2人のブータン人は1928年5月に2年間の課程を修了し、同様にベンガル工科カレッジで学んでいた1人のブータン人は1929年3月に3年間の課程を修了し帰国した。キャンベル医学学校で学んでいたパンチュンは1931年12月に最終試験に合格したが、さらなる技術習得のために滞在を1年間延長し1933年1月に帰国した。

特徴的なのは、進学・各種訓練に関わる諸費用のかかなりの割合を英領インド政府からの財政負担に依拠している点である。初代国王の書状により、ブータンは英領インドより4万9,629ルピーの財政援助を受け人材育成に積極的に活用した。ブータン側が費用を負担したものは年次報

告書の記述の中からはシロンのグルカ連隊での軍事訓練、カリンポンの病院での調合師訓練しか見つけることができない。また、1936年に第2代国王が当時の英領インド総督に送った書状の中にも、教育・各種訓練に対する財政援助を請う旨の記述がある⁷²。

また、ウィリアムソンによる1934年4月20日付の年次報告書によると、1933年1月に新たに14人のブータン人少年がシロンに派遣され、グルカ連隊に所属し2年間の軍事訓練を受けた。そのうちの2人は訓練終了後にグワリオールの山岳砲兵中隊に所属し、追加で3ヵ月間の訓練も受けている。他にも1930年代後半には、測量の訓練のためにデヘラードゥーンのインド測量局や外科医補佐の訓練のためにカルカッタのキャンベル医学学校に少年が派遣された事例が散見される。ただし、1930年代後半から1940年代にかけては留学生の進学もしくは各種訓練事情に関する記述もまた少なくなり、シッキム政務官の年次報告書からその詳細を知ることは難しい。

おわりに

以上、シッキム政務官による年次報告書やブータン訪問報告書の分析を主要手段として、ブータンにおける近代教育黎明期と位置づけられる1910～1940年代の国内の学校教育及び留学事情を解明することを試みた。

前半部分では、近代学校教育開始最初期の諸相に関して論じた。論点は以下の2点に集約される。1点目は学校の形態及び留学生との関係性である。分析の結果、少なくとも最初期にはハの学校は年間を通して開校していたわけではなく、カリンボンへ留学した少年らがウゲン・ドルジの「お国入り」に付き従いブータンに帰国している夏にのみ学ぶ場として機能しており、カリンボンへ留学した「46人」の少年たちとハの学校の第1期生「46人」は同一人物を指していることが明らかになった。また、プムタンの学校も季節移動を繰り返していた王家に付き従って場所を変える移動式の学校であったことが判明した。2点目はハの学校の第1期生のカリンボンでの留学先に関してであり、本稿では、彼等の留学先はブータンで使用されている歴史教科書にも記され一般的となっているドクター・グラハムズ・ホームではなく、SUMIであることを指摘した。

後半部分では、1910年代末から1940年代後半まで約30年の間に記された年次報告書からブータンの学校教育や留学事情に関する記述を抜粋し、国内の2つの学校の状況と就学者数の変遷をたどった。両校ともに1920年代に一時的に閉鎖され、第2期生を新たに迎え入れ再開していること等が明らかになったが、1930年代から1940年代にかけては依然として不明点も多い。この点に関してはさらなる研究調査が必要であり、今後の研究課題として残された。また、ブータンの近代化を担う人材がどこでどのように育成されたのかを知るために、主にハの学校の第1期生の進学及び各種訓練状況を追った。結果、大学入学資格試験合格者はインド北部・東部に位置する高等教育機関において森林保護官、外科医補佐、教員等になるために学業を続けたこと、他にも軍事訓練を受けたり測量技術を習得するために各地に派遣された者がいたことが判明したが、こちらも特に1930年代後半から1940年代にかけては詳細がつかめず、今後の研究の課題となっている。

【付記】 本稿は、JSPS 科研費（研究種目：若手研究（A）、研究課題：「近代学校教育草創期のブー

タンにおける学校教育及び留学事情の包括的解明」、研究課題番号：26705011、研究代表者：平山雄大）の助成を受けた研究成果の一部です。協力をしてくださった関係各所の皆様に厚く御礼を申し上げます。

注

- 1 Curriculum and Professional Support Division (CAPSD), Department of School Education, Ministry of Education (MoE) (2005) *History: A Supplementary Text for Class XII*, Paro: MoE, p. 60.
- 2 *Ibid.*
- 3 平山雄大 (2013) 「1940～1950年代のブータンにおける近代学校の類型とその対照的特徴」(日本国際教育学会『国際教育』第19号) 42-59頁。
- 4 例えば、Tandin Wangmo & Kinga Choden (2011) “The Education System in Bhutan from 747 AD to the First Decade of the Twenty-First Century”, in Yong Zhao (ed.), *Handbook of Asian Education: A Cultural Perspective*, New York: Routledge, pp. 442-451、Jagar Dorji (2003) *Quality of Education in Bhutan: A Personal Perspective on the Development and Changes in Bhutanese Education System since 1961*, Thimphu: KMT Publisher、Jagar Dorji (2005) *Quality of Education in Bhutan: The Story of Growth and Change in the Bhutanese Education System*, Thimphu: KMT Publisher、Singye Namgyel (2011) *Quality of Education in Bhutan: Historical and Theoretical Understanding Matters*, Thimphu: DSB Publication、杉本均 (2000) 「ブータン王国における公教育と青年の意識—伝統と近代—」(京都大学ヒマラヤ研究会『ヒマラヤ学誌』第7号) 11-31頁等。
- 5 杉本 (2000) 前掲論文、13頁。
- 6 Collister, Peter (1987) *Bhutan and the British*, London: Serinda Publications, p. 174.
- 7 CAPSD, Education Department, Ministry of Health and Education (MoHE) (1996) *A History of Bhutan; Provisional Edition, Course Book for Class X*, Thimphu: MoHE, p. 34.
- 8 Lam Pema Tshewang / Jagar Dorji (trans.) (出版年不詳) *History of Bhutan: The Luminous Mirror to the Land of the Dragon*, Thimphu: KMT Printing Press, p. 325.
- 9 Karma Phuntsho (2013) *The History of Bhutan*, Noida: Random House Publishers India Private Limited, p. 529.
- 10 CERD, Paro College of Education (2007) *Sherig Saga: Profiles of Our Seats of Learning*, Paro: CERD, p. 133.
- 11 Singh, Nagendra (1985) *Bhutan: A Kingdom in the Himalayas, A Study of the Land, its People, and their Government (Third Revised Edition)*, New Delhi: S. Chand & Company, p. 185.
- 12 C. T. Dorji (1995) *A Political and Religious History of Bhutan (1651-1906)*, Delhi: Prominent Publishers, p. 228. C. T. Dorji (1996) *A Brief History of Bhutan*, Delhi: Prominent Publishers, p. 50. C. T. Dorji (1997) *Blue Annals of Bhutan*, Delhi: Vikas Publishing House, p. 106.
- 13 Hasrat, Bikrama Jit (1980) *History of Bhutan: Land of the Peaceful Dragon*, Thimphu: Education Department, p. 125.
- 14 Singh (1985) *op. cit.*, p. 186. Savada, Andrea Maltes (ed.) (1993) *Area Handbook Series Nepal and Bhutan: Country Studies (Third Edition)*, Washington D.C.: Federal Research Division, Library of Congress, p. 284.
- 15 Aung San Suu Kyi (1985) *Let's Visit Bhutan*, London: Burke Publishing Company, p. 35.
- 16 大英図書館 (The British Library) 所蔵資料。L/P & S/12/2223, File2, Annual reports 1911-12 and 1946-47, June 1912-June 1947.

- 17 大英図書館所蔵資料。L/P & S/12/2222, File1, Affairs: visits by Political Officer, Sikkim; financial assistance, Dec 1930-Sep 1946.
- 18 Bell, C. A. (1915) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1914-15", No.65-E. C., dated Gangtok, the 12th (received the 17th) May 1915, p. 2. 冒頭にある「14」等はパラグラフ番号（以下同様）。
- 19 Bell, C. A. (1916) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1915-16", No.104-E. C., dated Gangtok, the 18th (received the 22nd) May 1916, p. 2.
- 20 Ugyen Wangchuck (1921) ("Letter to the Viceroy of India"), dated Pumthang, Bhutan, the 5th September 1921, p. 2.
- 21 Earl of Ronaldshay (1987) *Lands of the Thunderbolt: Sikkim, Chumbi and Bhutan*, Berkeley: Snow Lion Graphics, p. 245. 中尾佐助 (1959) 『秘境ブータン』毎日出版社、43頁。
- 22 ハの学校の第1期生の中には、後のブータンの教育開発において大きな役割を担うことになるタシ (Tashi)、カルチュン (Karchung)、パンチュン (Phenchung) の他に、ド・ティンレ (Do Thinle)、ゴロン (Gongloo) 等がいる。
- 23 Weir, J. L. R. (1931) "REPORT ON THE VISIT TO BHUTAN OF THE POLITICAL OFFICER IN SIKKIM AND THE PRESENTATION OF THE K.C.I.E. TO HIS HIGHNESS THE MAHARAJA OF BHUTAN", Letter from the Political Officer in Sikkim, No.16(1)-P./30., dated Gangtok, the 2nd April 1931, p. 6.
- 24 ブムタンの学校の第1期生には、後の第2代国王の他に、1960年代に新聞クエンセル (Kuensel) の発刊に携わったナクチュン (Nagchung) 等が名を連ねている。
- 25 Kuensel (2014/01/25) "A Footnote to the First Chapter in the History of Modern Education in Bhutan".
- 26 Lam Pema Tshewang / Jagar Dorji (trans.) (出版年不詳) *op. cit.*
- 27 Karma Phuntsho (2013) *op. cit.*
- 28 左端に写っているのはソナム・トブゲ・ドルジである。
- 29 Scottish Universities' Mission Institution (SUMI) (1986) *Sumite Century Sourvenir: The Editorial Board 1986*, Kalimpong: SUMI.
- 30 Earl of Ronaldshay (1987) *op. cit.* Morris, C. J. (1935) "A Journey in Bhutan", in Royal Geographical Society (RGS) (ed.), *The Geographical Journal*, Vol. 86 No. 3, p. 217, London: RGS.
- 31 Campbell, W. L. (1918) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year, 1917-18", No.114-P., dated Gangtok, the 18th (received the 22nd) May 1918, p. 2.
- 32 Bailey, F. M. (1922) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1921-22", No.177/P., dated Gangtok, the 29th April 1922, p. 2.
- 33 Kuensel (2014/01/25) "A Footnote to the First Chapter in the History of Modern Education in Bhutan".
- 34 ただし、第2代国王は1943年に当時のシッキム政務官であるグールドに対して、自身がチベット語とヒンディー語のみで教育を受けたことを悔いており、それゆえに息子である後の第3代国王に対して英語教育を施している旨を述べている。Gould, B. J. (1943) "BHUTAN: Visit of the Political Officer in Sikkim", No.6(2)-P/43., dated Gangtok, the 30th April 1943, p. 4.
- 35 Campbell, W. L. (1919) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1918-19", No.178-P., dated Camp Yatung, the 22nd (received the 28th) May 1919, p. 2.
- 36 Bell, C. A. (1920) "ANNUAL REPORT ON THE RELATIONS BETWEEN THE BRITISH GOVERNMENT AND BHUTAN FOR THE YEAR 1919-20", No.80-P., dated Gangtok, the 10th (received the 15th) May 1920, p. 2.

- 37 Macdonald, D. (1921) "Annual Report on the Relations between the British Government and Bhutan for the year 1920-21", No.3-P, dated Camp via Gangtok, the 10th May 1921, p. 2.
- 38 Bailey (1922) *op. cit.*, pp. 1-2, p. 3.
- 39 Bailey, F. M. (1923) "Annual Report on Bhutan for the year 1922-23", No.1092-G., dated Camp via Gangtok, the 18th May 1923, pp. 1-2.
- 40 Bailey, F. M. (1924) "Annual Report on Bhutan for the year 1923-24", No.317/P., dated Gangtok, the 16th June 1924, p. 2.
- 41 Bailey, F. M. (1925) "Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1924-25", No.166/P., dated Gangtok, the 27th April 1925, p. 2.
- 42 Bailey, F. M. (1926) "Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1925-26", No.290/P., dated Gangtok, the 17th May 1926, p. 3, pp. 4-5.
- 43 Bailey, F. M. (1927) "Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1926-27", No.31-P., dated Gangtok, the 25th May 1927, pp. 2-3.
- 44 Bailey, F. M. (1928) "Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1927-28", No.387/P., dated Gangtok, the 18th May 1928, p. 2.
- 45 Weir, J. L. R. (1929) "Annual report on the Bhutan State for the year 1928-29", No.35-P/29., dated Gangtok, the 29th May 1929, p. 2.
- 46 Weir, J. L. R. (1930) "Annual report on the Bhutan State for the year 1929-30", No.4(6)-P/30., dated Gangtok, the 30th April 1930, p. 1.
- 47 Williamson, F. (1931) "Annual report on the Bhutan State for the year 1930-31", No.4(6)-P/31., dated Gangtok, the 4th May 1931, p. 2.
- 48 Williamson, F. (1932) "Annual report on the Bhutan State for the year 1931-32", No.4(5)-P/32., dated Gangtok, the 22nd April 1932, p. 2, pp. 7-8.
- 49 Williamson, F. (1933) "Annual report on the Bhutan State for the year 1932-33", No.4(6)-P/33., dated Gangtok, the 3rd May 1933, p. 2, 6.
- 50 Williamson, F. (1934) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1933-34", No.4(6)-P/34., dated Gangtok, the 20th April 1934, p. 2, pp. 4-5.
- 51 Williamson, F. (1935) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1934-35", No.4(4)-P/35., dated Gangtok, the 7th May 1935, p. 3, 4.
- 52 Gould, B. J. (1936) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1935-36", No.4(8)-P/36., dated Camp via Gangtok, the 17th May 1936, p. 1, 3.
- 53 Gould, B. J. (1938) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1937-38", No.4(8)-P/38., dated Camp Wangiphodang, Bhutan the 30th May 1938, p. 1.
- 54 Gould, B. J. (1939) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1938-39", No.4(7)-P/39., dated Gangtok, the 16th May 1939, p. 1, 3.
- 55 Gould, B. J. (1940) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1939-40", No.4(5)-P/40., dated Camp-Lhasa, the 9th May 1940, p. 1, 2.
- 56 Gould, B. J. (1941) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State for the year 1940-41", No.4(5)-P/41., dated Gangtok, the 16th April 1941, p. 1.
- 57 Gould, B. J. (1942) "Annual report on the relations between British Government and Bhutan State for the year 1941-42", No.4(5)-P/42., dated the 1st May 1942.
- 58 Gould, B. J. (1943) "Annual report on the relations between the British Government and the Bhutan State

- for the year 1942-43", Gangtok, Sikkim, dated May 1943, p. 1.
- 59 Gould, B. (1944) "Annual report on the relations between British Government and Bhutan State for the year 1943-44", Gangtok, Sikkim, dated 22nd June 1944, p. 1.
- 60 Gould, B. J. (1945) "Annual report on the relations between British Government and Bhutan State for the year 1944-45", Gangtok, Sikkim, dated 23rd April 1945, p. 1.
- 61 Hopkinson, A. J. (1946) "Annual report on the relations between British Government and Bhutan State for the year 1945-46", Gangtok, Sikkim, The 31st May 1946.
- 62 Jigme Palden Dorji (1947) "Annual Report", Copy of letter No. 52, dated 12th April 1947.
- 63 Khandu-Om Dorji (2008) "A Brief History of Bhutan House in Kalimpong", in Centre for Bhutan Studies (CBS) (ed.), *Journal of Bhutan Studies*, Vol. 19 No. 1, Thimphu: CBS, p. 19.
- 64 ゴンジム・ウゲン・ドルジ高等学校の校舎内の仏塔には、プムタンの学校の第2期生は1923年に入学し、第3期生は1930年に入学したと記されているが、不明点も多いため本稿においてはこの点は検証しないこととする。
- 65 Weir (1931) *op. cit.*
- 66 SUMI (1986) *op. cit.*
- 67 Gould, B. J. (1938) "VISIT TO BHUTAN", Letter from the Political Officer in Sikkim, No.6(2)-P.38., dated the 26th August 1938, p. 2.
- 68 Gould (1943) *op. cit.*
- 69 Ugyen Wangchuck (1921) *op. cit.*
- 70 *Ibid.*, pp. 2-3.
- 71 また、植物探検家キングドン-ウォード (F. Kingdon-Ward) は、1925年2月にブータン東部タシガン (Trashigang もしくは Tashigang) にて、通訳として派遣されてきたという、大学入学資格試験受験前の「ダージリン (筆者注：実際はカリンボンか?) で学校に通ったことがあるというブータン人の若者」に会っている。Kingdon-Ward, Frank (1926) *The Riddle of the Tsangpo Gorges*, London: Edward Arnold & Co.
- 72 Jigme Wangchuck (1936), ("Letter to the Viceroy of India"), dated Tongsa, Bhutan, the 20 February 1936, p. 4.